INVESTIGATIONS ON THE AWARENESS OF HIGH SCHOOL STUDENTS TO THE PROBLEM OF LEPROSY

Hiroichi KITANO

(Tuberculosis Prevention Section, Public Health Department, Ministry of Welfare)

The knowledge and appreciation of high school students in regard to leprosy was investigated as an aid in improving the leprosy prevention program.

Five thousand questionnaires each were distributed in a relatively prevalent prefecture Gifu, and in Ibaragi Prefecture where leprosy is relatively rare. The response was 78.5%.

The results show that of all the major diseases, leprosy is the most feared and this fear is extreme compared with others. The cause for the fear was emotional in the greater number (42.9%) followed by incurability of medical therapy (33.3%).

The causal factor was reported as infection in the wide sense, including predisposition by 58.0% but 25.9% believed that heredity was the cause.

Though leprosy was feared, there was no special prejudice towards leprosy patients and the majority (91.0%) were sympathetic.

Almost all reported that the proper steps would be taken if leprosy was found in members of the family or relatives but the answers were reasonless as what the individual would do if himself contracted leprosy. In answer to the question as what you would do if leprosy was discovered in the family of the person who you had selected for marriage, 58.9% answered, that the engagement would be broken. This was especially true in the case of girls.

Knowledge concerning the possibility of cure was low (11.7%) but the attitude toward patients who would be returned to society was cooperative in 45.0%, rational in 40.5%, and negative or uninterested in 12.8%.

Knowledge concerning leprosy was lower in Ibaragi prefecture than in Gifu prefecture and more girls than boys still had a mistaken idea about leprosy.

癩に対する高校生の意識調査

北 野 博 一

厚生省公衆衛生局結核予防課

(1958年8月6日 受稿)

緒 言

癩予防法が公布されてから昭和 32 年で満 50 年になる

が、この間日本の癩患者は次第に減少し、且つその大部分が療養所に収容隔離せられて巷間に浮浪する患者は絶無に近くなり、一般人殊に若い高校生の大部分は癩患者

を見たこともなく、癩とはどんな疾病であるかも知らないと考えられる。

治癩薬の出現によつて最近療養所から軽快退所する知会復帰者も多くなりつつある今日、若い高校生は癩についてどの程度の知識を有し、又癩患者及び癩についてどんな感情を抱いているかを調査し、新しい癩対策の樹立に資せんとした。

調 査 方 法

- 1) 調査の対象及び時期
- 昭和 32 年 6 月 25 日救癩の日を中心として、茨城県及び岐阜県内の各地区に分布する高等学校に調査表を送り、生徒に無記名で回答を依頼した。
- 回答は予め印刷された答の中から択んで○印を付ける選択方式を採用した。
- 調査対象高校数及び調査表の回収状況は第 1 表の如くである。

区 分 県 別		人口 (名)	調 査 高校数	回 答 数 (名)			回答率 (%)
				男	女	計	
茨 城 県	北 部	541,992	12	581	560	1,141	
	東 部	554,466	13	498	886	1,384	
	南 部	506,025	12	514	489	1,003	
	西 部	461,554	13	423	715	1,138	
	計	2,064,037	50	2,016	2,650	4,666	84.8
岐 阜 県	西 濃	309,434	1	206	397	603	
	中 濃	789,597	7	693	532	1,225	
	東 濃	282,561	2	438	354	792	
	飛 騨	202,013	1	389	179	568	
	計	1,583,605	11	1,726	1,462	3,188	70.8
合 計		3,647,642	61	3,742	4,112	7,854	78.5

- 2) 調査地区の癩病勢
- 岐阜県は著者がさきに発表¹⁾²⁾³⁾した如く、往昔は癩濃厚県であつたが最近では日本の平均罹患率に近く減少して来たとは言え、尙人口 10 万対 1.5 の在宅患者を有するに比し、茨城県は第 2 表の如く従来新発生患者も在宅患者も全国平均以下であり、現在是在宅患者皆無の無癩県である。而して生存患者の総数は 125 名、罹患率 (人口 10 万対) 6.0 であり、その出身地の地域別状況は第 1 図の如く北部に多く他の地区は非常に少い。又茨城県には昭和 30 年に藤楓協会支部が設立せられ、31 年・32 年の両

年救癩の日を期して募金運動が展開された。

第 2 表

年次	在宅患者数 (人口10万対比)			新発見患者数 (人口10万対比)		
	茨 城 県	岐 阜 県	全 国	茨 城 県	岐 阜 県	全 国
1906 年	362 (30.0)	(66.0)	(49.3)			
25	87 (6.2)	(30.0)	(20.7)			
40	53 (3.2)	(12.7)	(8.0)			
50	12 (0.6)	(2.5)	(2.0)	11 (0.5)	(1.0)	(1.2)
51				6 (0.3)	(1.0)	(0.7)
52				1 (0.1)	(0.4)	(0.5)
53				4 (0.2)	(0.4)	(0.6)
54				7 (0.3)	(0.6)	(0.5)
55	5 (0.2)	(1.5)	(1.2)	8 (0.4)	(0.6)	(0.5)
56	6 (0.3)	(1.6)	(1.2)	4 (0.2)	(0.8)	(0.4)
57	0 (—)	(1.5)	(1.2)	3 (0.1)	(0.7)	(0.4)

第 1 図 茨城県癩病勢

- 1) 癩はおそれられている
- 老衰を除いた現在の主要死因 (脳卒中・癌・心臓病・結核)、難治の精神病、特殊の伝染病 (癩・性病・日本脳炎・流脳・痘瘡・赤痢) 及び時代の脚光を浴びている放射能障害等の 12 疾病から 3 つおそろしいと思うものを撰ばせた結果は第 3 表の如くで、癩が第 1 位を占め第 2 位以下との差が大きい。県別の差は殆んど無いが、女子

は男子に比して癩に対する恐怖心が大きい。

第 3 表

順位	病 名	数	%	内 訳 (%)			
				茨城県	岐阜県	合	♀
1	癩	5,099	23.1	23.5	22.4	20.8	25.1
2	が ん	3,462	15.6	15.1	16.4	15.3	15.9
3	放射能障害	3,360	15.2	15.3	15.0	15.4	15.0
4	性 病	2,724	12.3	13.3	10.8	10.1	14.2
5	結 核	2,384	10.8	10.6	11.0	13.2	8.7
6～12	そ の 他	5,086	23.0	22.2	24.4	25.2	21.1
合 計		22,115	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(註) 第 6 位 精 神 病 (6.8%) 第 7 位 日本脳炎 (5.1%)
第 8 位 流 脳 (3.9%) 第 9 位 心 臓 病 (2.4%)
第 10 位 脳 卒 中 (2.0%) 第 11 位 痘 瘡 (1.5%)
第 12 位 赤 痢 (1.3%)

癩をおそろしい病気の 1 つとして扱んだ者は全調査対象 7,854 名中 5,099 名で 64.9 % にあたっているが、別の質問で癩を単独に抽出し「おそろしいか」の質問に対して第 4 表の如く「おそろしいと思う」と答える者が 88.1% に増加しており、矢張り女子が男子よりも多い。男子では女子に比し判らないと答えた者の率が多くなっているのも目立つ。

第 4 表

回 答 内 容	数(名)	%	内 訳 (%)			
			茨城県	岐阜県	合	♀
おそろしい	6,922	88.1	88.6	87.4	84.3	91.6
おそろしくない	202	2.6	2.5	2.7	3.4	1.8
わからない	730	9.3	8.9	9.9	12.3	6.6
計	7,854	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

癩のおそれられる理由は種々考えられるのであるが、おそろしいと答えた者のみについてその理由を類型別にまとめると第 5 表の如くである。

第 5 表

類型	内 容	数(名)	%	内 訳 (%)			
				茨城県	岐阜県	合	♀
I	家族を悲惨にする	1,810	18.0	35.4	36.6	33.8	35.5
	他人に迷惑かける	938	9.3				
	周囲に嫌われる	556	5.5				
	顔がみにくくなる	264	2.6				
II	難 治	1,996	19.8	33.3	30.3	37.6	34.2
	医療が不完全	1,365	13.5				

III	伝染する 隔離される	1,246	12.4	14.2	13.4	15.1	13.7
		178	1.8				
IV	遺伝する	969	9.6	11.2	7.4	8.1	11.0
V	何となく	756	7.5	8.5	6.1	8.4	6.7
計		10,078	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

類型 I 及び V の如く感情的即ち対家族的或は対社会的感情に於て恐怖を感じる者が最も多く 42.9% に達し、次いで難治或い医療の不完全を理由とする者(類型 II) が 33.3% である。性別による差は認め難いが、茨城県では岐阜県より類型 I が多く類型 II が少い。

癩をおそろしくないと答えた者は極少数にすぎないが、その理由は予防出来るからが 28.4%, 医学が発達したからが 22.9%, 医療が完全だからが 11.7% 等で医学への信頼に基ずくものが大部分である。

2) 癩又は癩患者についての経験

茨城県に於ては救いの日の行事として募金運動が展開されており、また調査の約 2 週間前に県内居住の三上ちよ女史が救癩の戦士としてナイチンゲール記章受章のことが新聞紙上に大きく報道される等の事実があつたが、岐阜県に於ては救らいについての弘報が全国的規模で行われた以外に特別の行事はなかつた。このような状況で癩が最近話題になつたかどうかについて調査した結果は第 6 表の如く、茨城県に於て最近ありが稍々多かつたに過ぎず、一般に癩は話題にのぼらないで弘報の結果は極めて不良である。しかし女子は男子に比し癩についての関心が高いことを示す。

第 6 表

問	答	数(名)	%	内 訳 (%)			
				茨城県	岐阜県	合	♀
患者か を見たことが ある	しばしば	212	2.7	2.3	3.2	2.6	2.7
	1～2 回	1,208	15.4	15.1	15.9	15.3	15.5
	な し	6,434	81.9	82.6	80.9	82.1	81.8
	計	7,854	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
癩か が話題になつた	最近あり	687	8.7	10.2	6.6	6.5	10.8
	以前あつた	3,259	41.5	40.8	42.5	36.9	45.7
	な し	3,908	49.8	49.0	50.9	56.6	43.5
	計	7,854	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

癩患者を直接或はパンフレット等の写真等ででも見たことがあるかの質問に対して大部分が無経験であつた。

3) 癩は遺伝か伝染か

癩に関する社会の啓蒙は従来常にその病因についてであつた。しかし癩は血統なりという思想は仲々払拭されないうで残つている。癩患者についての経験が殆んどなく、話題にもならなかつたと答えた者が大部分である若い世代の高校生の間で病因について如何に認識されているかを調査した結果は第 7 表の如くである。

第 7 表

病 因	数(名)	%	内 訳 (%)			
			茨城県	岐阜県	♂	♀
遺 伝	2.035	25.9	28.6	21.9	24.1	27.5
伝 染	3.048	38.8	36.9	41.6	37.2	40.2
伝 染 + 体 質	1.511	19.2	18.1	21.0	20.7	18.0
体 質	202	2.6	2.7	2.4	1.8	3.3
わからない	1.058	13.5	13.7	13.1	16.2	11.0
計	7.854	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

伝染説は38.8%に過ぎないが最も多く、伝染ではあるが体質も関係するとする広義の伝染説は19.2%に存し、この両者を合せて正解率は58.0%であり、遺伝説は25.9%に過ぎなかつた。正解率は男女間に差が認められないが、茨城県は岐阜県に比し、正しい知識の普及の遅れていることが有意の差で認められる。

4) 癩及び癩患者に対する反応

前述の如く癩は大部分の高校生に怖れられているが、癩患者個人に対してはどんな感情を抱いているかを調査した結果は第 8 表の如くである。

第 8 表

患者に対する感情	%	内 訳 (%)	
		♂	♀
堂々としていたらよい	4.8	91.0	92.5
気の毒に思う	80.5		
そつとしておいてあげたい	5.7		
気持ちが悪い	2.5	8.8	7.5
甘えすぎだ	0.2		
すねていると思う	0.6		
因果応報だ	5.5		
回答なし	0.2	0.3	0.0
計	100.0	100.0	100.0

即ち積極的に患者に対して堂々としていたらよいと激励する者 (4.8%) 及び消極的でそつとして置いてあげ

たいと思う者 (5.7%) を含めて、患者に対して同情的である者は91.0%に達し、僅かに 8.8% が気持ちが悪い・甘えすぎだ・すねている・因果応報・無関心等と患者に対して批判的乃至非同情的である。男子に比し女子に同情論者が少々多くなつている (♂ 89.5%, ♀ 92.5%)。

次に「あなたの親戚や肉親に癩患者が出たらどうしますか」の質問に対する回答は、専門医の診察を受けるようすすめるが 76.7%, 療養所に行くことをすすめるが 21.4%, その他が 1.9% で殆んど全員が理性的に答えている。しかし「もしあなたが癩だと診断されたらどうしますか」に対する回答では、自殺するだろうが16.5%にも達し、その他かくす工夫をするとか自暴自棄になるだろう等の回答も 8.9% に存在し、一時はショックを受けるが自ら療養所に行くと答えた者は74.6%で、自分自身のこととなれば理性的に行動し得る者が減少する。

更に結婚に際して癩がどんな位置に於て考慮されるかを「結婚の相手方の家系に癩があつたらどうしますか」と設問してみると第 9 表の如き結果を示した。

第 9 表

態 度	数(名)	%	内 訳 (%)			
			茨城県	岐阜県	♂	♀
破談にする	1.490	19.0	20.2	17.1	16.9	20.8
円満に解消する	3.134	39.9	44.8	37.1	36.1	43.3
健康診断で異常ないなら 本人に異常が } 結 ないなら } 婚	2.524	32.1	31.2	33.6	34.3	30.2
	276	3.5	3.4	3.7	3.9	3.2
問題にせず結婚	169	2.2	0.9	4.0	4.0	0.5
回答なし	261	3.3	2.5	4.5	4.8	2.0
計	7.854	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

直に破談又は円満に解消するなど、癩家系が結婚の支障となるのは58.9%の過半数に達する。しかし本人に異常がないなら或は健康診断の結果異常なければ結婚するとする者が37.6%に存することは結婚の際の家系調査で癩が重要な位置を占めていた往昔に比して現代の若い人々——結婚適令期には尙早の高校生にとつては切実感の乏しい仮定の問題であつて理想論に走りすぎた感みなしとせず——の間では大人達の古い思想を打破していることは喜ばしい。

茨城県では破談乃至円満解消論者の割合が岐阜県よりも多く、より封建的であると考えられる。又男子よりも女子に破談乃至円満解消論者の多いことも奇異であるが、女子はそれだけ結婚について慎重且つ封建的であり

男子は理性的であり得るのであろう。これらの差はともに有意の差である。

5) 癩の治癒可能性と社会復帰者に対する態度

プロミン等の治癒薬の出現は大風子油のみに頼っていた戦前の暗い療養所を明るい陽のあたる場所に変化させ、早期治療によつて完全治癒が可能となり、社会復帰者も年々相当数出ているが、一般の人々は癩の治癒可能性について如何に啓蒙されており又如何に考えているかを調査した結果は第10表の如くである。

治癒可能と答えた者は 11.7% に過ぎず、殊に 茨城県

第10表

類 型	癩の治癒について	数(名)	%	内 訳 (%)	
				茨城県	岐阜県
I	治ると信ずる	846	10.8	8.8	16.3
	治つた人を知っている	70	0.9		
II	完全には治らない	3,627	46.2	48.5	42.7
III	治らないと思う	600	7.6	7.9	7.2
IV	わからない	2,551	32.5	35.0	33.8
	回答なし	160	2.0		
計		7,854	100.0	100.0	100.0

(8.6%) では岐阜県 (16.3%) の約半致に過ぎず、啓蒙の不徹底を示している。不治と断定するものは治癒可能とする者より少いが、半信半疑の者はわからないと答えた者を加えると78.7%にも達する。

この程度の理解しか持たぬ人々の社会復帰者を迎える感情は第11表の如くであり、治癒信頼の程度と社会復帰者を迎える態度との関係は第12表の如くである。

第11表

類 型	社会復帰者に対する態度	数(名)	%	内 訳 (%)	
				茨城県	岐阜県
I	証明があれば喜んで交際する	1,529	19.5	45.0	44.7
	何とも思わず交際する	161	2.0		
	治癒を祝福し喜んで迎える	1,842	23.5		
II	心配だが差別待遇は不可	3,178	40.5	40.1	41.0
III	不完全治癒だから付き合い合ぬ	521	6.6	9.8	7.3
	癩だつたから付き合い合ぬ	125	1.1		
	しぶしぶ交際する	48	0.6		
IV	無 関 心	313	4.0	4.9	7.0
	回 答 な し	137	1.7		
計		7,854	100.0	100.0	100.0

第12表

社会復帰に 治癒について	I 協 力 的 名 (%)	II 理 性 的 名 (%)	III 非 協 力 名 (%)	IV 無関心、無答 名 (%)	計 名 (%)
I 信 (%)	569 (16.1) (62.1)	261 (8.2) (28.5)	45 (6.5) (4.9)	41 (9.1) (4.5)	916 (11.7) (100.0)
II 半 信 (%)	1,595 (45.2) (44.0)	1,609 (50.6) (44.3)	307 (44.2) (8.5)	116 (25.8) (3.2)	3,627 (46.2) (100.0)
III 不 信 (%)	187 (5.3) (31.2)	212 (6.7) (35.3)	159 (22.9) (26.5)	42 (9.3) (7.0)	600 (7.6) (100.0)
IV 不明、回答なし (%)	1,181 (33.4) (43.6)	1,096 (34.5) (40.4)	183 (26.4) (6.8)	251 (55.8) (9.2)	2,711 (34.5) (100.0)
計 (%)	3,532(100.0) (45.0)	3,178(100.0) (40.5)	694(100.0) (8.8)	450(100.0) (5.7)	7,854(100.0) (100.0)

社会復帰者に対し非協力的である者は僅かに 8.8% であるに反し、心配だが差別待遇は不可と答える者が40.5%に達しているのは若い世代の理性を重んずる気風の強いことを示している。また積極的な社会復帰協力者が 45.0%で最大値を示すことは喜ばしい現象である。この比率が県別にも性別にも大差がなく、上述の如く全般に癩に対する思想普及が遅れていると認められる茨城県に於てさえ、この積極的協力論者の多いのは特異である。

社会復帰に積極的協力を示す者が癩の治癒を信ずる者では62.1%で過半数を占め、治癒を信じない者では31.2%と半減しているのは当然であるが、これが社会復帰に非協力的である者 (26.5%) より多いことは矛盾を感じる。癩は日常遭遇する問題ではないので迫真力の乏しい設問となり、回答も現実性を無視した理想論となり、全般に社会復帰協力論者及び理性的賛成論者が増加したとも考えられる。

たとえ現実に即さない空論とはいえ、若い世代の観念は社会復帰者を忌避するにはあまりにも純粹すぎるのであろう。特にこの傾向は岐阜県の女子に於て顯著であつた。即ち治癒不信者 116 名中社会復帰非協力11.2%，理性的賛成42.2%，積極的協力36.2%である。

理性的に社会復帰者の差別待遇は不可と答える者は治癒に対し半信半疑の者に多い。

6) 療養所の見学について

癩に関する知識慾の一端と考えられる療養所見学について意志の有無の調査結果は、積極的希望者26.6%，療養所が近ければ見学したいと一応の関心を有する者18.5%で将来の啓蒙普及の有力な場が提供されていると考えてよい。

7) 癩対策について

最後に総合的判断のもとに日本の癩対策はどうしたらよいかについての回答は第13表の如くである。

第13表

対 策	数 (名)	%
全患者の隔離	6,712	85.4
重症患者隔離	581	7.4
家族とともに特定地区	298	3.8
隔離不要	14	0.2
癩対策より結核対策	103	1.3
回答なし	146	1.9
計	7,854	100.0

大部分の者が全患者の隔離を主張し、隔離 不 要 論 は 0.2% に過ぎず、重症者のみの入院隔離或は家族とともに特定地区での生活等は何れも少数意見の範囲を出ない。

全患者隔離を主張する根拠は伝染を怖れてか、単なる感情的忌避によるかは速断することは出来ないが、他の問に対する回答の内容別に全員隔離論者の割合を検討すると第14表に示す如くである。

第14表

回 答 種 類 別		総 数 (名)	全員隔離論者の率 (%)
病 因 について	遺 伝	2,035	83.3
	伝 染	3,048	89.4
	伝 染 + 体 質	1,511	83.5
	体 質	202	85.1
	わからない	1,058	81.1

恐 怖 心	おそろしい	6,922	86.4
	おそろしくない	202	80.7
	わからない	730	77.6
対患者感情	同 情 的	7,877	86.3
	激 励 的	441	81.9
	無情・因果応報	804	80.9

即ち病因についての回答別では遺伝論者及び伝染力弱く体質も関係するとする者は明快に伝染であると回答した者に比し隔離に対する態度が有意の差で緩和されているが、その差が僅少であるのは患者を単に感情的に忌避して隔離を主張する者が多いことに起因すると考えられる。

次に癩に対する恐怖心の有無別では有意の差とならない。また患者に対する感情別では同情的である者に却つて隔離を主張する者が多いが有意の差ではない。

考 按

癩に関する社会調査は癩事業の改善発展を図るために必須のものであることは柳田⁴⁾も論じているところであるが、塩沼⁵⁾等、松沢・井上⁶⁾等の発表をみるに過ぎない。

著者は癩の比較的濃厚な地方として岐阜県を、比較的稀少な地方として茨城県を択び、高校生を対象として調査した。茨城県では癩予防思想普及団体としての藤楓協会支部が存在して、その支援の下に調査は全県的に順調に捗つたのであるが、岐阜県に於ては県教育委員会を通じて調査表を配布せんとしたところ、癩の調査という点のみで困難となり、遂に各保健所長の協力により個別的に高校の理解を得て配布調査せざるを得なくなり、学校数が限定された。この事実は癩の特殊性と癩に対する認識程度を示すものである。

癩の病因については塩沼⁵⁾等の全国保健所に対する調査では 伝染論 23%，松沢等⁶⁾の調査では単純伝染論 78%・伝染但し体質遺伝論11%で広義の伝染論が89%となつたのに比し、著者の成績の伝染論は58%で前二者の中間に位する。松沢等の成績は奈良女子大の保健学教室学生という特殊の対象であつて正しい認識の普及度が高いのは当然であるが、一般高校生の正解率58%は比較的高い認識度と言わねばならない。

癩の病因について正しい認識を持つ女子大生で癩家庭に同情的な者が20%に過ぎず、嫌悪・白眼視・敬遠等が34%にも達するに比し、高校生では癩患者に対し同情的である者が圧倒的に多い (91%) のは家庭と患者の差が

設問の上にあつたとは言え、若い者ほど純粹に物を考えると言ひ得る。

結婚に際しての考え方は女子大生では癩について考えるとする者が90%・考えないとする者が3%であるに反し、高校生では健康診断して異常なければ結婚すると答えた者が32.1%にも達した事は、設問の方法に差があつた事及び高校生にとつては未だ具体性を持たぬ問題で観念的に回答されただろう事の影響も考えられるが、若い世代にとつては癩が結婚に際して考慮外の事象となりつつあるとみてよい。

高校生の大部分(81.9%)が癩患者を見たことのない者であり、癩或は癩患者について最近話題になつたと答えた者は極めて少い(8.7%)にも拘らず、癩に対する恐怖乃至嫌悪の感情を如何にして抱くに至るかは別に考察されねばならぬところであるが、周囲の成人達から幼時に聞かされて形成された先入観による誤つた判断或は癩を題材とした小説等の影響が大きいのではなからうか。

茨城県及び岐阜県の各地域別に各質問に対する回答の内容を調査するに若干の差はあるが特別な関係は見出されなかつた。

結 論

茨城県及び岐阜県の高校生 10,000 名に対し癩についての意識調査を実施し78.5%の回答率を得たが、その内容から次の如く結論する。

- 1) 癩は主要疾病中で最も怖れられており、且つ他の疾病に対する恐怖の度合に比し極端に高度である。癩がおそろしい病気ではないとする者は僅かに2.6%である。癩に対する恐怖の原因は感情的なものが42.9%で最も多く、次いで難治等の医療上の不安が33.3%である。
- 2) 癩患者を実際に或は写真等でも一度も見たことのない者が81.9%にも達し、約半数の者で癩が未だ曾て話題となつたことがないと回答する如く、若い人々の癩に関する経験は極めて乏しいにも拘らず、癩に対して特別な恐怖感を持つに至つた理由は別に考究されねばならない。

- 3) 癩の病因については体質も関係するとする者を含めた広義の伝染説は58.0%を占め、かなり高い正解率であるが、今尙遺伝と信ずる者が25.9%に存在する。
- 4) 癩は恐怖の対象であるが、癩患者については特別の偏見はなく、患者に対して同情的である者が91.0%にも達している。
- 5) 家族や親戚に癩患者が出た場合には殆んど全員が正しく行動し得るが、自分自身が若し発病したらと仮定すれば少々理性的行動が鈍り、更に結婚の相手の家系に癩があつた場合には破談乃至円満解消する者が58.9%に存在する。而して女子に於て結婚の際の癩は男子より重大関心事である。
- 6) 癩の治癒可能性についての認識は11.7%であるが、社会復帰する治癒者に対する態度は協力的である者が45.0%で最も多く、理性的に差別待遇は不可とする者も40.5%であり、否定的乃至無関心である者は12.8%に過ぎず、若い世代の関心は特異的である。
- 7) 茨城県では癩に関する啓蒙の機会が多いが、患者数は少く、一般に癩に対する考え方が岐阜県より封建的であつて、更に啓蒙普及の必要性を認める。両県の各地域別の観察では特殊なものを認めない。
- 8) 女子は男子に比し一般に旧思想に支配される度合が強く、癩の恐怖感・結婚に際しての考慮が強い。

稿を終るに臨み北海道大学安倍教授の御指導御校閲を深謝するとともに、御協力戴いた茨城県及び岐阜県の各高等学校・衛生部の各位の御好意を感謝する。

なお本研究は藤楓協会茨城県支部の御援助に負う所が大きかつたことを記して謝意を表する次第である。

文 献

- 1) 北野 博一：レプラ，26，325（昭 32）
- 2) 北野 博一：レプラ，27，62（昭 33）
- 3) 北野 博一：レプラ，27，No. 2（昭 33）
- 4) 柳田 重久：星光，No. 192（昭 32）
- 5) 塩沼・石原・森・山田：らい予防法発布50周年記念論文集（長島愛生園）179（昭 32）
- 6) 松沢・井上・森・山田：らい予防法発布50周年記念論文集（長島愛生園）213（昭 32）